

『伊勢物語』東下り章段の歌

— 景物に対応する行為の表現 —

藤河家利昭

はじめに

『伊勢物語』は、「昔、男ありけり」と語り始められる一人の男の物語として、東下りではどのようにその特色を発揮するであろうか。それは男がその旅において出会う景物への対応の仕方によって示されるのである。そしてその男の特色を語るのが歌であると考えられる。東下りの旅について、「都を遠ざかる旅を続ける男の心が東国へと向かうのではなく、かえって都、都の恋人への慕情を物に触れて培うことになる機微に注意したい^(注1)」という指摘がある。基本的にそのことをふまえながら、ここでは歌に詠まれる景物の捉え方から、物語の歌として心情を表わすものではなく行為を表わすものとして考えてみたい。そのために地の文、特に章段の冒頭に語られる男の事情との関係について見ていく。

ここでは七段から十段までを取り上げる。これは東下りの始まりから武蔵の国に行き着くまでの旅であり、一区切りをなしているものと考えられる。

一、「返る浪」

七段は、八段とともに東下りの序の役割を持っていると思われる。

昔、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白く立つを見て、いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る浪かな

となむ詠めりける。^(注2)

阪下圭八氏は、この歌について、

七段での「いとどしく…」の歌は、物語地によってうたわ

れた状況が限定・特殊化されながら、同時に積み重ねられた状況を、一挙に情緒的に集約しそして解放するという機能を示すものであった。それは、後撰集のよりも、はるかに具体的で切実な人間の内面としてあらわれており、歌自体の文学性が見事に更新されたとせねばならない。^(注3)

のように物語の歌の機能と『後撰集』との違いを述べられている。先ず『後撰集』からこの歌の捉え方を見ていくことにする。

東へまかりけるに、過ぎぬる方恋しくおぼえけるほどに、河を渡りけるに浪の立ちけるを見て 業平朝臣

いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくも返る浪

かな^(注4)
(卷十九 羈旅・一三五二)

詞書の「東へまかりけるに、過ぎぬる方恋しくおぼえけるほどに」は歌の上句に、「河を渡りけるに浪の立ちけるを見て」は下句にそれぞれ対応している。このことは、この歌が過ぎて来た京が恋しく思われるという旅の歌であることを示している。同時にその上句の望郷の思は下句にそのまま及んでいくものである。従って、歌の意味は、過ぎてゆく京がいつそう恋しいのに羨ましいことに浪は返ることだ、それは京に帰る気持ちを起こさせてよけいに京が恋しくなるというのである。

物語では「京にありわびて東にいきけるに」とあり、男は京に居づらくなつて東国に行ったのである。このことが歌の捉え方はどう関わってくるであろうか。『惟清抄』は次のように解釈

している。

浪のうち寄せては返り、うち寄せては返りするを見て、我は都に住みわびて田舎もとめするに、あの浪はうらやましくも返るよとよめり。^(注5)

「京にありわびて東にいきけるに」が歌の下句の「うらやましくも返る浪かな」に関わると見ていることになる。

京に居づらくなつて東国に行ったという事情の下で、伊勢と尾張の国境の海辺に行くのであり、尾張になるとさらに東国に深く入ることから、歌の上句の「いとどしく過ぎゆく方の恋しきに」と、いつそう過ぎていく京が恋しく思われるのである。

「過ぎゆく」は「東にいきけるに」「海づらをゆくに」を受けている。従って、上句において過ぎて来た京を恋しく思う気持ちとその理由はふまえられているのである。その上でそのことに男がどう対応するかを語るのが下句である。「浪のいと白く立つを見て」を受けて、「うらやましくも返る浪かな」では、浪は帰ることができるので羨ましいというのである。しかし、男には京に帰ることができる事情があり、それは今まで抑制していた京に帰るということを「返る浪」によって初めて表わすことができるのである。歌の下句は、「京にありわびて東にいきけるに」という事情と深く関わり、しかも対立的な意味を持つことになる。そして物語としてはそのような情況から一転して返る浪に寄せて自分も京に帰りたいと思う男の姿が語られている

である。物語では歌に込められるべき情況や心情を地の文で語るのである。その結果、歌はその字義どおり生かされることになる。

このように見ると、上句は伊勢と尾張の国境の海辺に行くところから出てくるのに対して、下句は浪がたいそう白く立つのを見てということをつまねながら「返る浪」に男が京に帰ることを重ねるところに飛躍がある。景物の動作が男の帰るという行為を導くのである。そのことを可能にしているのが「返る・帰る」の掛詞である。歌のこのような技法が物語の形成に深く関わっていることになる。また男は「返る波」が自らの帰る思いを表わすのにふさわしいものとして捉えている。「京にありわびて東にいけるに」という設定は重要である。それは、男が京に帰ることができないという制約を負わせるとともに、物語を展開させる前提にもなっているからである。

七段は、東下りの最初の段として、後に続く東下り関係章段の、男の東国への関わり方の一面を示したものと考えられる。

二、「浅間の嶽に立つ煙」

八段は、七段と対になりながら、また東下りにおける男の異なる一面を示していると思われる。

昔、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東の方にゆきて住

み所求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ

七段と八段とは海と山、^(注6)「浪のいと白く立つ」と「浅間の嶽に煙の立つ」のように対応している。

歌については、「此歌は浅間の山の奇妙なる所を詠みたてたる也」(『惟清抄』)、「京近辺では見られない噴煙に接しての驚嘆と郷愁の歌」(対訳日本古典新書)のように取られている。同じ歌を載せる『新古今集』の歌の捉え方を見ておく。これは『伊勢物語』から取られたとされる。

東の方にまかりけるに、浅間の嶽に煙の立つを見て詠める
業平朝臣

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ(巻十 羈旅・九〇三)

信濃にある浅間の嶽に立ち上る煙を見てあちらこちらの人は見とがめないことがあるうかと、京にはない珍しい光景に接した驚きと今更ながら遠い所にやって来たことだという旅の愁いを述べたものである。

物語には、「京や住み憂かりけむ、東の方にゆきて住み所求むとて」と、男は京が住みにくくなったのか、東国に行って住む所を求めるといふ旅の動機が示される。「京や住み憂かりけむ」

は、七段の「京にありわびて」よりも具体的であり、「東の方にゆきて住み所求むとて」は独自である。また、友人を一人二人伴っていることはそれだけ共有する動機や意識があったと考えられる。このような男の事情を歌に反映させたと思われるものに次のような解釈がある。

(口語訳略) 京では想像もできないこのような光景を目にするにつけ、京を遠く離れてしまったという実感が胸をしめつける、捨てたはずの京なのに。(講談社文庫)

七段とは異なつて「京や住み憂かりけむ」、「住み所求むとて」と、男が東国に住む場所を求めていること、また友人を伴っていることはどう考えればよいであろうか。歌の上句「信濃なる浅間の嶽に立つ煙」は、「信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て」をふまえ、男たちが見ている光景と場所を示している。その上で下句の「をちこち人の見やはとがめぬ」は、「京や住み憂かりけむ、東の方に住み所求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり」と対応して、浅間の嶽に立つ煙を見るように、「住み所」を求めようとする自分たちを土地のあちらこちらの人が見とがめないことがあるかというのである。男は「浅間の嶽に立つ煙」が異様で目に立つことに自分たちの姿を見ているのである。それは男たちがこの土地と相容れない異質のものを意識せざるを得ないからであると考えられる。物語は、京に住みにくくなつて東国に行き「住み所」を求めるのであるが、東

国でも落ち着き場所を得ることが難しいと思っている男たちの姿を語っているのである。

物語がそのように展開するのは、自分たちを「浅間の嶽に立つ煙」に見立てることからきている。それによつて「見やはとがめぬ」という煙に対する行為が自分たちにも向けられるからである。これはやはり歌の技法を物語の形成に生かしているのである。しかし、この景物は「をちこち人」が「見やはとがめぬ」というものであつて男が自分たち自身を表わすのに即したものではない。

七段は「返る浪」、八段は「浅間の嶽に立つ煙」という京にはない景物に男は自らの姿と重なる行為を見出している。しかし、「返る浪」は自らの思いを表わすのに即し、「浅間の嶽に立つ煙」は自身を表わすのに即していない。そのことは、七段が京に居づらくなつて東国に行き「返る浪」を見て帰京を思い、八段では京に住みにくくなつて東国に行き「住み所」を求めながら「浅間の嶽に立つ煙」を見てその土地と相容れないものを感じるという、東国への関わり方において二面を持つ男の姿が示されている。このことは両面相俟つて後に続く東下り関係章段の方向を示していると考えられる。

三、「杜 若」

九段は、景物の捉え方及び男の東国への関わり方は七段を継ぐと思われる。

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、東の方に住むべき国求めにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りゐてかれいひ食ひけり。その沢に杜若いと面白く咲きたり。それを見てある人のいはく、「かきはたとといふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心を詠め」といひければ詠める、

唐衣着つつ馴れにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人かれいひの上に涙落としてほとびにけり。

男は、我が身を不要な者と思いきめて、京にはいまい、東国に住むことができる国を求めようとして旅に出た。これは七段、八段の冒頭と関連するが、住むことができる国を求めにという

のは八段に近い。また以前からの友人、一人二人と連れだつて行つたのも類似している。この冒頭の文について次のような説がある。

「身をえうなきものに思ひなして」という9段の冒頭は、8段・7段と廻行するにつれて、現実的鮮度を増して、二条后章段と脈絡を通じることとなり、男の物語の構想の重要な契機をなすとともに、東国物語の集約的表現として生彩を放っているのである。^(注8)

東国武蔵国に住みついた「男」を語る章段あるいはその前段階とも読める章段群の存在は、なぜ東下り章段においてそのような表現が必要だったのかということを示している。^(注9)

このように東下りの物語の中での役割が論じられているが、ここでは九段の中で持つ意味を考える。この冒頭の文は九段全体に関わるものと考えられる。また物語の地の文と歌との関わりについて次のような説がある。

伊勢にあつては、右にみてきた物語地の総体が漂泊する旅人の世界としてあらわれ、それがつよく歌に波及する。すなわち、機智よりも抒情に、景物としての杜若よりもはるけき旅の実感に傾斜した歌がここに現前してくるのだ。^(注10)

ここでは物語の歌として「男」をどのように語っているかを考えてみたい。同じ歌を載せる『古今集』の捉え方を先ず見てお

く。

東の方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり。三河国八橋といふ所に至れりけるに、その川のほとりに、杜若いと面白く咲けりけるを見て、木の蔭に下りゐて、「かきつはた」といふ五文字を句のかしらにすゑて、旅の心を詠まむとて詠める 在原業平朝臣

唐衣着つつ馴れにし妻しあればはるる来ぬる旅をしぞ
思ふ^(注1) (巻九 羈旅・四一〇)

『古今集』では、「東の方へ、友とする人ひとりふたりいざなひていきけり」によって、東国への旅であり、作者が一人二人の友を誘ったものであることから、この歌が妻を思う歌ではなく旅の歌であることを示している。そして三河の国八橋に着いて、「その川のほとりに、杜若いとおもしろく咲けりけるを見て、木の蔭に下りゐて」とあるように、木の蔭に馬から下りて坐ったのは、川の辺に杜若が美しく咲いていたのを見たからである。

『古今集』では「杜若」に焦点が当てられている。それは「かきつはた」の五文字を句の頭に据えるためであったであろう。その杜若から妻を連想して、馴れ親しんだ妻を京に残しているの遙々とやって来た旅のことをしみじみと思う、こうして遠くまで来ると妻のいる京のことが偲ばれてならないというのである。上句の「唐衣着つつ馴れにし妻しあれば」は、下句の遙々とやって来た旅を思うことの理由であるだけでなく、その心情

にも及んでいる。

物語では、男は我が身を不要な者と思いきめて、京にはまい、東国に住むことのできる国を求めようとして行った。歌では杜若によって京にいる妻のことを思い出す。我が身を不要な者と思いきめても京には妻がいるのである。その馴れ親しんだ妻がいることに立って、男は遙々とやって来た旅を思うというのである。しかし、男には京と縁を断ち、帰ることができないという事情がある。妻がいるということによって初めて京から遠く離れた旅の思いを表わすことができたのである。「その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらず、東の方に住むべき国求めにとてゆきけり」は、歌の上句と下句に対応する形で歌の詠まれた背景の核心となる部分である。

『古今集』の詞書では上句の「唐衣着つつ馴れにし妻しあれば」に関係する「杜若」を中心に据えていたが、物語では沢の辺の木の蔭に馬から下りて坐ったのは、「その沢のほとりの木の蔭に下りゐてかかれいひ食ひけり」と、「かかれいひ」を食べるためであった。「その沢に杜若いとおもしろく咲きたり」と、杜若は偶々そこに咲いていたのである。「けり」も用いられず、物語の骨格からは外れた扱いである。その杜若から妻のことを連想するのであるが、『古今集』に比べれば軽い扱いである。これは、「かきつはた」を句の頭に置いて歌を詠めと言われたことの効果があるとも言えるが、物語としては「唐衣着つつ馴れにし妻し

あれば」という前提に立つて、男がどう対応したかを「はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」によって語ろうとすることに重点があると考えられる。

「あづまの方に住むべき国求めにとてゆきけり」、「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり」、「道知れる人もなくて、まどひいきけり」と、「ゆきけり」、「いきけり」を畳みかけるのは、下句の「遥々来ぬる旅」を行爲として裏付けを与えるためと考えられる。そして「三河の国八橋といふ所に至りぬ」とした上で、その由来を、「そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋といひける」と、京にはない珍奇なものとして語っているのも物語の骨格を形作る扱いである。このことも「遥々来ぬる旅」に実質を持たせるためであろう。

男の歌によって「皆人、かれいひの上に涙おとしてほとびにけり」と、「かれいひ」が同行の皆の涙によってふやけてしまったのであり、その歌が皆の共感を呼び起こすものであったことを語っている。このことは「その沢のほとりの木の蔭に下りゐて、かれいひ食ひけり」とあったことの結果である。「かれいひ」を食べることが、『古今集』とは異なつてその沢に下りた目的であったことには意味があると思われる。それがそういう結果をもたらすには歌の表現自体にも要因がある。それは「唐衣着つつ褻れにし棲しあれば」と、着なれて柔らかくなった着物

を、「張る張る着ぬる旅をしぞ思ふ」と、何度も洗い張りをして着ながら旅をしてきたことに反して、「かれいひ」の方はふやけてしまったというのである。このことは「みな人、かれいひの上に涙落としてほとびにけり」が、下句に緊密に対応していることを示している。それは「遥々来ぬる・張る張る着ぬる」という掛詞を生かそうとすることであり、下句が心の中の思いとしてではなく、行爲として実質的な意味を持つことを示している。また「皆人、かれいひの上に涙落としてほとびにけり」は、歌に込められた心情を地の文で語っていると見ることが出来る。それも歌の言葉と並びに生かそうとすることである。

男が我が身を不要な者と思いきめて、京にはいまい、東国に住むことができる国を求めようとして行ったことに対して、我が身のことではなく妻の存在によって京から遙かに遠く来てしまった旅に思いを馳せ、京との繋がりを持つことができたのである。これは九段全体の方向を示していると考えられる。物語の歌は、男自身の事情と旅の状況を地の文で語ることによって、歌の表現を字義どおりに生かそうとしているのである。ここでは「杜若」は、「妻」を連想させるものとして「棲」の縁で「遥々来ぬる（張る張る着ぬる）」という行爲を導いている。男にとって「杜若」は京との繋がりを持つことができるものとして自らの思いに即したものである。

四、「宇津の山辺」・「富士の嶺」

宇津の山の段である。

ゆきゆきて駿河の国に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らむとする道はいと暗く細きに蔦かへでは茂り、もの心細くすずろなる目を見ることと思ふに、修行者逢ひたり。「かかる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京にその人の御もとにとて文書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

ここでは三河の国から駿河の国に移り、歌を詠む場所は八橋の「沢のほとり」と「宇津の山辺」のように対照的である。

先ず『新古今集』がこの歌をどう捉えているかを見ておきたい。

駿河の国宇津の山に逢へる人につけて、京につかはしける
業平朝臣

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり
(卷十 羈旅・九〇四)

駿河にある宇津の山辺に来て現実にも夢にもあなたにお逢いしないことだ、あなたが夢の中でも逢いに来て下さらないのは、このような京を遠く離れ心細い所なので恨めしいというのであ

る。「駿河なる宇津の山辺の」から受ける東海道の難所という印象は以下の相手を恨む気持にも及んでいる。

物語では、宇津の山に来て、これから男が入って行こうとする道はとても暗く細い上に、蔦や楓が茂り、辺りの様子が心細くともない目に遭うことだと思っている。これが歌の「駿河なる宇津の山辺の」の実際の情景である。その上で「うつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」は、「修行者逢ひたり」を受けて、現実にも夢にも「人」に逢わないことだという京の「その人」への思いが示される。修行者は唐突に男たちに逢ったのである。修行者が「かかる道はいかでかいまする」と言うようにこの道は男たちが行くような道ではないのである。「修行者逢ひたり」は、対照的に「うつつにも夢にも人に逢はぬ」を行為として際立たせている。京との繋がりを断たれている男にとって、この「宇津の山辺」は、文を伝える知人に逢って、現実にも夢にも「人」と逢うことができないとすることによって、却って京にいる「人」との関わりを持つことができる所である。「駿河なる宇津の山辺の」は、序詞として「うつつにも夢にも人に逢はぬ」という男の行為を導くのである。「宇津の山辺」は男が京の「人」への思いを表わすのに即したものである。

富士の山の段である。

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の

降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりは塩尻のやうになむありける。

宇津の山の段と同じ駿河の国の山であるが、「宇津の山辺」に對して「富士の嶺」を對照させている。「五月のつごもり」と時季が明示されるが、宇津の山の段も「鳥かへでは茂り」、八橋の段も「杜若」とあるのでいずれも夏と考えられる。

浅間の山と富士の山について次のような説がある。

「都」びとである主人公にとって、この両山は、「おなか」

たる「遠国」をまのあたりに感じさせるものであり、だからこそ主人公はその景物を、「都」の理念にはずれたものとして捉え、それが大景物であるにもかかわらず、ことさらにそれをとがめるような形でうたいもするのである。^(注13)

「『都』の理念」によって景物を捉える男のあり方が説かれている。ここでは男の景物への対応の仕方について考えたい。先ず『新古今集』の捉え方を見ておく。

五月のつごもりに、富士の山の雪白く降れるを見て詠み侍りける 業平朝臣

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ (巻十七雑中・一六一六)

この歌は、時節をわきまえない山は富士の嶺である、今がいつというので鹿の子まだらに雪が降り積もっているのだろうか、

今の時季に雪が降り積もっていることなど考えられないのにというのである。「時知らぬ山は富士の嶺」という富士の山に対する驚きは、「いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」という理由によって裏付けられるとともに、その驚きの気持ちはその部分にも及んでいる。

物語では、「五月のつごもりに雪いと白う降り」が歌の「いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」と対応している。「五月のつごもりに」に對して「いつとてか」(いつということ^(注14))、「雪いと白う降り」に對して「鹿の子まだらに雪の降るらむ」である。そのことに立つて「時知らぬ山は富士の嶺」と言うのであるが、これは京を基準にした言い方である。そのことを裏付けるのが、歌の後の「その山は」以下で、京で喩えると比叡の山を二十ほど重ね上げた高さで、形が塩尻のようであるという、京の山を超越した高さと円錐形の珍しい形によるのである。これは京の人が見たことのない富士の山の説明をするだけではない。地の文では「富士の山」と言い、歌では「富士の嶺」と言うように聳え立っている意味合いがある。「ここ(京)にたとへば」として持ち出している^(注15)ので、京の人も「比叡の山」は言うまでもなく「塩尻」もよく知っているものと考えられる。京に帰ることができない男にとって、京とは全く異なる所で富士の山を見ているが、「比叡の山」や「塩尻」のような京の人の身近なものを抛り所に「時知らぬ山」とすることで、却ってかろう

じて京と繋がっているのである。これは宇津の山の段が「うつつにも夢にも人に逢はぬ」所でありながら、そう言うことによって却って修験者を通じて京と繋がりを持つことができたのに対応している。ここでは富士の山を擬人化し、「時知らぬ山」と、山自体の行為として捉えている。「富士の嶺」は男が京人としての思いを表わすのに即したものである。

五、「都鳥」

都鳥の段である。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国との中にいと大きな河あり。それを隅田河といふ。その河のほとりに群れるて、「思ひやればかぎりなく遠くも来にけるかな」とわびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」といふに、乗りて渡るむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、嘴と足と赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

駿河の国の宇津の山と富士の山に対して武蔵の国と下つ総の国との中の隅田河である。また八橋の「水ゆく河」と対応し、「都鳥」と「杜若」も水に因む景物である。

この歌と地の文との関わりについて次のように言われている。
この歌は只武蔵と下つ総の中に大なる川ありといふより「みな人物がなしくて」といひ、「さる折しも白き鳥」と詞にいひたるをこの歌の心にこめて見侍べき也。かぎりなき余情侍べし。〔肖聞抄〕

地の文の内容を歌の心に込めて見るべきものとしている。ここでは地の文で語られていることをふまえて歌で男がどのように対応するかを考えるのである。『古今集』のこの歌の捉え方から見ていく。

武蔵国と下総国との中にある隅田河のほとりに至りて、都のいと恋しうおぼえければ、しばし川のほとりに下りて、「思ひやればかぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわびてながめをるに、渡守、「はや舟に乗れ。日暮れぬ」と言ひければ、舟に乗りて渡るむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の嘴と足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず。渡守に「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」と言ひけるを聞きて詠める

在原業平朝臣

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや
と（巻九羈旅・四一一）

『古今集』には物語にない部分として、「都のいと恋しうおぼえければ」がある。そのためにしばらく川の辺に馬から下りて坐り、「思ひやればかぎりなく遠くも来にけるかな」と思ひわびてながめをるに」と、武蔵の国と下総の国との国境まで来た道のりに思いを馳せ、消沈して物思いをしているのである。また「隅田河のほとりに至りて」、「しばし川のほとりに下りゐて」、「川のほとりに遊びけり」のように「川のほとり」に場所が限定されている。「舟に乗りて渡らむとするに」とあっても、まだこれから漕ぎ出そうとするところであると考えられる。これはこの歌が都恋しさからここまでの遠い道のりを思う旅の歌であることを示している。「わが思ふ人」については「皆人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず」と、ことさら抑えた言い方である。またこれまでは作者の行動として述べてきたのにここから「皆人」となっている。これらは歌の下句が「わが思ふ人はありやなしや」とあることによって恋の歌と取られないようにするためと考えられる。歌は、都の名を持っているならばさあ尋ねてみよう都鳥よ、わが思ふ人は生きているのかいないのかと、このような遠い所に来て都のあの人のことが思われてならないというのであり、重点は下句にある。

物語では、隅田河の辺に群がって坐り、「思ひやればかぎり

なく遠くも来にけるかな」とわびあへるに」と、『古今集』とはほぼ同様にこの上なく遠い所へやって来たものだと思っているが、それは皆でということである。このことは八橋で詠んだ歌の「はるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」を受けるものと考えられる。しかし、『古今集』のように遠くへ来たことは言うが、都恋しさを前面には出していない。「皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」は、『古今集』と同様に抑制した言い方になっている。これは歌の下句「わが思ふ人はありやなしやと」を言うためであるが、『古今集』とは異なる意味があると思われる。

歌で「都鳥」に向かつて「わが思ふ人」の存否を尋ねる。^{注16}その結果、「舟こぞりて泣きにけり」という皆の悲しみ呼び起こす。それは「都鳥」の代わりに「舟」が応えたようである。男たちは「その河のほとりに群れゐて」から「乗りて渡らむとするに」を経て、「水の上に遊びつつ魚を食ふ」という時には既に河の上に漕ぎ出していると見られる。歌で都鳥に問いかけた時には「舟こぞりて泣きにけり」とあることから船中にあるのである。『古今集』では都鳥を「河のほとりに遊びけり」とするが、物語では「水の上に遊びつつ魚を食ふ」とする。都鳥と舟とは同じ水上にあって対等の位置にある。従って「舟こぞりて泣きにけり」は上句の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥」と直接に対応している。このように見ると下句の「わが思ふ人はありやなしやと」という状況をふまえて、上句の都鳥に対する「いざ

言問はむ」という男の行為に重点が置かれていると考えられる。また「舟こぞりて泣きにけり」は、「かれいひの上に涙落としてほとびにけり」と同様に歌に込められるべき心情を地の文で語るものである。

男自身は京との繋がりが断たれているが、「都鳥」に問いかけることによって初めて京にいる「わが思ふ人」と繋がることのできたのである。ここでは「都鳥」を擬人化し、「いざ言問はむ」という男自身の行為を引き出している。また「都鳥」は京にいる「わが思ふ人」への男の思いを表わすのに即したものである。

このように九段では、男は自身のことではなく、「妻」、「人」、「時知らぬ山」、「わが思ふ人」などによって京との繋がりを持つことができるのであるが、それを可能にするのは東国ので出会う景物である。「杜若」、「宇津の山辺」、「富士の嶺」、「都鳥」から引き出される「遙々来ぬる（張る張る着ぬる）」、「うつつにも夢にも人に逢はぬ」、「時知らぬ」、「いざ言問はむ」などの行為を含む句は、地の文ともう一方の句の情景をふまえることによってそれに対する男の対応の仕方が示される。そして男自身の京との関わりを断つような事情が設定されているが、それによって歌で示される男の姿を対立的に際立たせるのである。

六、「たのむの雁」

十段は、八段を継ぐ形で景物の捉え方及び男の東国への関わり方が示されている。

昔、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。この婿がねに詠みておこせたりける。住む所なむ人間の郡、みよし野の里なりける。

みよし野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると
鳴くなる

婿がね、返し、

わが方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつ
か忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。「武蔵の国までまどひ歩きけり」は、九段の「武蔵の国と下つ総の国との中に」を受けるが後に戻っている。また「道知れる人もなくてまどひいきけり」と関連している。^(注17)ここはあちこちさまよいながらたどり着いたということである。九段の「都鳥」と「みよし野のたのむの雁」は関連しているが、「都」を名に持

つのに對して鄙びたものである。

先ず『続後拾遺集』のこの歌の捉え方を見ておく。

業平朝臣、武藏の国入間の郡みよし野の里といふ所に
住み侍りける女に通ひけるを、この女の父はあらぬ人
にといひければ、母なんだこの人にこそと思ひて詠
みてつかはしける よみ人しらず
みよし野のたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴く
なる

返し

在原業平朝臣

我が方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘
れん^(注18) (卷十三恋三・八〇〇、一)

母の歌の「みよし野のたのむの雁」は、「武藏の国入間の郡みよし野の里といふ所に住み侍りける女」を受けて娘のことである。また、女の父は違う人と言ったので母はひとえにこの人にと
思つて詠んだということから、母の歌は、みよし野の田の面の雁もひたすらあなたの方に心を寄せると言つて鳴いているよう
です、娘も私と同じようにあなたを頼りにしていますというの
である。返しは、私の方に心を寄せると言つて鳴いているとい
うみよし野の田の面の雁を忘れる時はありません、私を頼りに
しているという娘さんのことを忘れることはありませんという
のである。返歌は「みよし野のたのむの雁」をそのまま受け、
「君が方にぞよると鳴くなる」を「わが方によると鳴くなる」と

受けているが、「たのむの雁をいつか忘れん」に母の気持も受け止めて娘のことを忘れることはないと答えているのである。

物語の冒頭は「昔、男ありけり」ではなく、「昔、男、武藏の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり」とある。このことは男のあり方にどう関わってくるであらうか。父は違う人と言ったが、母は「あてなる人」に娘を結婚させたいと思つていた、父は「なほ人」であつたが母は「藤原」であつたので「あてなる人」にと思つたという。父と母の間に身分の差があり、母が男と結婚させたいのも男の高貴な身分によるのである。母の歌は、「その国にある女」、「住む所なむ入間の郡、みよし野の里なりける」から娘を「みよしの野たのむの雁」と言い、「あてなる人」である男には「君が方」と言っている。これに對して男は、母が男を「婿がね」としたのに應じて「婿がね」として返歌をしている。男の歌は母の歌の言葉にほぼそのまま応じたものであり、その上で男は「たのむの雁」をいつか忘れん」と答えるのであつて男が独自に答えた言葉はここだけである。これは女の側の頼む気持ちに應えていつまでも忘れることはないというのである。しかし、それは女を「みよしの野のたのむの雁」とし、自らを「わが方」とする限りにおいてであると考えられる。「その国にある女」と「あてなる人」との隔たりがここにもあるのである。「婿がね」という言い方は語り手の皮肉のようにも聞こえる。

男の歌の後には、「人の国にても、なほかかることなむやまざりける」とある。「かかること」は、「女に言い寄って歌をよみかわすような行為」(新大系)、「男のこうした風雅な歌のやりとり」(対訳)のように解される外に、二条の後物語、それに続く東下りの諸段との関連から、『かかること』とは、簡単に言えば、女を深く思うこと、『いつか忘れむ』というような歌を詠み贈ることと解すべきであろう(注釈稿)という説などがある。

それは、京だけでなくこのような他国でも止まなかったというのである。これは男の歌を受けると考えられるので女の頼む気持ちをも男が受け止めるということである。それは気持ちを述べたということではなくそのような対応をする、しかもどこでもする男のあり方を語ったものと考えられる。これは冒頭の「男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり」と、さまよい歩いた所で出会った女に言い寄っていることからそう考えられるのである。また、男の方が求婚していたのに対して女の側の気持ちを受け止める方に立場が逆転している。

ここでは「たのむ(頼む)の雁」の「頼む」に対して「いつか忘れん」という行為によって男の東国の女への関わり方が示されているのである。しかし、八段の「浅間の嶽に立つ煙」が「をちこち人」に見とがめられるかも知れないものであったように、「たのむの雁」も母の言葉をそのまま受けたもので、歌も

「婿がね」として詠まれたものであり、男自身に即したものでなかったと考えられる。

終 わ り に

東下り章段では、歌に詠まれる景物から掛詞、見立て、序詞、擬人化などの歌の技法によって行為を導いている。七段の「返る浪」、九段の「杜若」、「宇津の山辺」、「富士の嶺」、「都鳥」などの景物は、男の京への思いに即したものと捉えられている。それによって男は帰ることができない京に繋がりを持つことができるのである。これに対して八段の「浅間の嶽に立つ煙」、十段の「たのむの雁」などの景物は、京人である男自身に即したのではない。ここでは男が東国において異質である姿が語られるのである。このことは歌を詠む男として見ると、置かれている状況を歌によって超えようとする面と、自らの独自性を発揮する面と二つの面を持っている。この両面を合わせ持つところに男の特色が捉えられるのである。それは初段と二段、二条の後関係章段にも見られるのであり、この物語に一貫するものと考えられる。^(注19)

その東国での行為を含む句を際立たせるために、地の文によって行為を含む句に重点を置き、含まない句をその前提として用いること、その段の冒頭に男自身の京との繋がりを断つ事

情を置くこと、また歌の後に行為を含む句を引き立てる結果や評語を加えることなどが行われている。それは歌に関わる事情や心情を地の文で表わし、歌自体の字義を生かすことであった。このことは元来業平の歌の格の大きさと情の豊かさを生かそうとしたと考えられるが、歌に詠まれる景物から行為を引き出すことによって物語は新しい可能性を切り開くことができたのである。

注

- (注1) 堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』(岩波書店)
- (注2) 『伊勢物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。但し、表記は改めた所がある。
- (注3) 「歌物語の世界―伊勢物語七、八、九段をめぐって―」『日本文学誌要』一九六六年十一月
- (注4) 『後撰集』、『新古今集』の引用は、『新日本古典文学大系』(岩波書店)による。但し、表記は改めた所がある。
- (注5) 『惟清抄』、『肖聞抄』の引用は、竹岡正夫著『伊勢物語全評釈』による。但し、表記は改めた。他にも「都へ今帰って行けない自分の身を思いながら返る波をうらやましく見ていることになる」『伊勢物語全訳注』と解されている。
- (注6) 塚原鉄雄著『伊勢物語の章段構成』一九八八年十月 新典社、初出『中古文学』第三十八号 一九八六年十一月
- (注7) 池田亀鑑著『伊勢物語精講』は「寓意不明の歌」としながら、「我々一行も人々の見怪しむところであろうに」という訳が付けられている。他に「その恋(都で引き起こした恋の問題)筆者

(注) の述懐を浅間寄せた歌」(全評釈) という解もある。

- (注8) 河地修「二条后関係章段 伊勢物語の鑑賞2」『一冊の講座 伊勢物語』一九八三年三月 有精堂
- (注9) 仁平道明「『伊勢物語』に見る東国」『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇二年十一月
- (注10) 注3に同じ。
- (注11) 『古今集』の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。但し、表記は改めた所がある。
- (注12) 「知らない道をたどたどしく進んでいったその心理を、短かい文を積み重ねることによって表わしているからです」(小松英雄著『伊勢物語の表現を掘り起こす「あづまくだり」の起承転結 二〇一〇年八月 笠間書院) という指摘がある。
- (注13) 山本登朗著『伊勢物語論 文体・主題・享受』二〇〇一年五月 笠間書院、初出『国語国文』一九七七年八月
- (注14) 「いったい、今がいつということ」(角川文庫)、「今が一体いつ、というわけで」(全評釈)。
- (注15) 新井無二郎著『評釈伊勢物語大成』に、「守部の説」として「此塩尻のことを、当時京人の拾く見知つたもの故に、それを取出して書いたので、六条河原の塩尻を譬えたのだといふのは、勝れた説である」とある。
- (注16) 「いざ」を「同行の人々を促す呼びかけの語」と見て、「さあ、皆、話しかけてみようではないか」とする説(石田穰二『伊勢物語注釈稿』・角川文庫)があるが、これも「返る浪」、「時知らぬ山」のように直接景物に向かって思いを述べたものと同様に考えられる。
- (注17) 「類例は九段に『道知れる人もなくて、まどひいきけり』とあった。おそらくは、それを受けた措辞であろう」(注釈稿)という指摘がある。
- (注18) 『統後拾遺集』の引用は、『新編国歌大観 第一巻勅撰集編』に

よる。

(注19) 拙稿「『伊勢物語』初段の「いちはやきみやび」―行動の表現としての歌―」(『広島女学院大学 国語国文学誌』第三十八号 二〇〇八年十二月) 及び「『伊勢物語』「二条の后物語」の歌―心の表現から行為の表現へ―」(『広島女学院大学大学院 言語文化論叢』第十号 二〇〇七年三月)

The Poem in the Tale in Relation to the Journey
to the East Side of the Country in “Tales of Ise”
——Expression of Action for Responding to Scenery——

Toshiaki FUJIKOUGE

Abstract

In the tale in relation to the journey to the east side of the country, the action has been expressed by using the technical way of poem, such as the play on words, the metaphor, the prologue and the personification, regarding the scenery in the poem. Those sceneries, such as “a returning wave” in the seventh tale, “an iris”, “Mount Utsu”, “Mount Fuji” and “an oystercatcher” in the ninth tale, have been considered as the feeling which the man had for “Kyoto”. By using such technical poetry, the man has been able to connect to Kyoto even though he is not able to return at that time. However, in comparison with the sceneries in the tale mentioned above, sceneries such as “the smoke which has risen from Mount Asama” in the eighth tale and “the wild goose on the paddy field” in the tenth tale, have not followed the same concept. In fact, these sceneries have been showing his circumstances where he is not same as other people living in the east side of the country. Considering him as the man writing a poem, he has been establishing two aspects. Namely, one aspect is that he has been trying to live through such a difficult time by writing a poem. The other aspect is that he has been showing his distinctive identity. Such characteristics have been shown in the first and second tale and in the tale in relation to the empress of Nijo, and seem to be consistently expressed in this entire tale.